法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-23

【書評】高屋敷直広『身体忘却のゆくえ：ハイデガー『存在と時間』における〈対話的な場〉』（法政大学出版局、二〇二一年）：沈黙する身体に抗う語り

SAITO, Motoki / 齋藤, 元紀

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政哲学 / HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY
(巻 / Volume)
19
(開始ページ / Start Page)
83
(終了ページ / End Page)
86
(発行年 / Year)
2023-12-29

【書評】
高屋敷直広『身体忘却のゆくえ――ハイデガー『存在と時間』における〈対話的な場〉』（法政大学出版局、二〇二一年）

沈黙する身体に抗う語り

齋藤元紀

本書は挑発的な書物である。それは何より「身体忘却」という言葉を標題に掲げ、ハイデガー存在論に長らく寄せられてきた「身体論の不在」という問題に正面切って答えようとする姿勢に窺えよう。そればかりでなく、「他者との対話の不在」や「倫理の不在」といった批判にも応答しようというのだから、ハイデガー研究者ならずともその大胆さには目を瞠らずにはいられない。本書はハイデガー存在論のいわば「裏面」に光をあて、その実相を余すところなく見極めようとする果敢な企てなのである。

とはいえ、従来の通説に真っ向から抗うだけに、本書の立場に疑念を抱く向きもあろう。わけても本書の中心概念をなす「身体」は問題含みである。身体にほぼ言及も考察も行わず「沈黙」していたのだから、ハイデガーは「身体」を「忘却」していたのではないか。だとすれば、ハイデガーは「存在忘却」とともに「「身体」が忘れ去られることとも戦っていた」というのは（五頁）、レトリカルな主張に過ぎないのではないか。

だが、そうした非難はまったくの的外れである。というのも、ハイデガーは『存在と時間』の基礎存在論を身体性の「前提」としても考えていたからである。『存在と時間』から約十年後に執筆された「『存在と時間』への継続的注記」では、こう述べられている。「人間学のうちで人間は何よりまず常に動物である――生物学。基礎存在論ではこうした人間の性格は否定されていない――反対に――人間の身体性（*Leiblichkeit*）への問いを立てるために、ようやく前提が作られるのである」（GA82, 9）。この文言だけ

も、本書の狙いがハイデガーの意図の核心を突いていることは明らかだろう。

とはいえその言及の少なさゆえに、この「前提」を展開するにはやはりそれなりの手立てが必要となる。そこで本書は「対話的な場」という独自の概念を設定する。それは「自己と他者にとって、「身体」・「語り」・「倫理」の連関を通じて成り立つ」「存在論的に」「根源的な場」であり、「個別の倫理学」の基礎をなす（十頁）。中後期の展開を射程に収めたこの魅力的な概念のもと、第一章では『存在と時間』の時間論の限界が「自然」の概念に即して再検討され、「自然」から「身体」への経路が見いだされる（四八-四九頁）。次いで第二章では、身体は「肉体」や「物体」のみならず、「時間」にも還元されずに、「実存論的な空間性を可能にする〈場〉」として構想されている点が指摘される（八一-八二、八四頁）。さらに第三章では、「語り」と連関して現存在の開示態を形作る「身体」が、「身振りとしての場」として『存在と時間』の実存論的空間性のうちに読み込まれる（一一三頁）。

続く第四章では、身体が共存在の次元へと拡張される。ただしそこでの共存在は、世人間ないし決意した実存間の共存在ではなく、「現事実的で異質な他者と出会うための〈場〉」としての「身体」によって担われるとされる（一四九頁）。第五章は、「言うこと」と「名付けること」を、ハイデガー独自のギリシア語源学のうちで跡付け、それらに先立つ「聞くこと」が「存在」との「対話」の構成契機として提示される（一八一頁）。そして第六章では、三層の対話の場が『存在と時間』に見いだされる。第一層は「おしゃべり」、第二層は実存間の相互の身体に基づく「対話」、そして第三層は存在との「対話」の「場」であり、これらが「根源的倫理」の実相を構成しているとされる（二一一-二一三頁）。

本書は結論として、自己と他者が語り合う「対話」の「場」が、それぞれの固有の「身体」に基づいて開かれると主張する。現存在はそれぞれに異なる身体性を有しているうえ、自己と他者の関係もそのつど異なるため、対話的な場は相互理解に応じて現出し、また隠蔽される。それゆえ対話的な場は、自己と他者を媒介する共通項であると同時に、差異を絶えず生み出すダイナミックな可変項でもある。「〈対話的な場〉とは、常に三つの場の層からなる多義的な意味を有している」（二二四頁）。身体性と差異への着目のもと、身体性の意義を「根源的倫理」として析出するこの結論は、本書の白眉と言えよう。

テキストに対する正確な読解をとおして身体・語り・倫理を一つに縒り合わせる行論は、ときにそれらの相互関係

が見えにくくなる憾みも残るものの、やはりきわめて精緻に組み立てられている。また、最新の先行研究にも丹念に目配りしつつ、さらにそれらに対する批判を積み重ねる立論も、じつに説得的である。さらにそうした考察をとおして、「暴力」とそれに抗するための「複数的相互関係」を打ちたてようとする切実な問題意識も大いに啓発的である。そうした意味で、現代における身体・語り・倫理といった諸問題に対しても、本書は幾多の刺激的な手がかりを提供していると言って過言ではない。

しかし他方、のちのハイデガーの思想的展開を考慮するなら、さらに究明すべき重要な論点が残されているように思われる。第一は動物の問題である。一九二九・三十年講義における動物と人間の比較考察には、動物に対する〈迂回〉の姿勢が窺えるが、これは身体や自然に対する姿勢と類比的である。第二章のセルボーン説の検討では若干触れられているが、しかし「言葉をもたない（アロゴン）」者との関係は、対話や倫理の観点からもさらに立ち入って考察すべき論点であろう。

第二は民族の問題である。三十年代以降のハイデガーの共同性をめぐる思考は、民族の概念へと集中する。自民族中心主義としてしばしば批判の的となる悪評高い概念だが、しかしそれが現存在の被投性を土着的に構成する存在論的身体性として構想されていた点も否めない。第四章に登場する「現事実的な共存在」の概念は些か〈中立的〉に見えるが、それとこの民族概念はどう関係するのか。『存在と時間』の被投性の理解から言っても、この関係は看過しえない論点であるように思われる。

そして第三は歴史性の問題である。本書は身体の空間性に重心を置いているため、身体の現事実性や、対話や倫理といった共存在をめぐる考察も概ね〈共時的〉水準に留まっている。しかしハイデガーの西洋哲学史批判は、時間性ひいては歴史性といった〈通時的〉水準とも切り離せない。この点は、ハイデガー独自のギリシア語源学への参照をめぐる第五章の考察のみならず、ハイデガーという〈過去〉の思想との「対話」を目論む本書全体がすでに前提としていたはずである。身体や対話や倫理に通底するそうした独自な「歴史」的性格の究明が、ハイデガー存在論の本来の狙いだったのではないか。

このように身体をめぐる語りと倫理はなお多くの問題を孕んでいるように思われるが、それはおそらく著者も十分自覚していた点であろう。著者自身が指摘する残された課題（二二五–二二六頁）には、すでに上記の三つの問題に対する目配りも十分に感じとれるからである。沈黙する身体に抗うべく試みられた著者の語りは、新たな語りの可能

性へと耳を傾けている。本書の挑発的な企ての射程は、倫理的対話のそうした豊かな可能性にまで、すでに及んでいるのである。